

唐木順三全集

筑摩書房版

唐木順三全集第十八卷

昭和五十七年九月三十日初版第一刷發行

著者 唐 木 順 三

發行者 布川角左衛門

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一一九一

電話 東京(291)七六五一(營業)

東京(294)六七一一(編集)

振替 東京 六一四一二三

印刷 株式會社精興社
製 本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan 0395—74518—4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが、小社読者係あて
にご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

古いこと新しいこと

一 歴史の生命

歴史の生命	三
『古今集』の撰者たち	六
隠者について云々することのむづかしさ	一八
一 遍	二九

文學・歴史・宗教	四
西田先生の『遺墨集』刊行にちなんで	四
私の念願	五

二 山房記その他

老梅半死	六
五十年夏	七
五十一年八月の記	九
五十二年夏の記	九
土偶小感	一〇
玉に瑕	二
死の灰についてのひとりごと	一八

三 ひと

『井月全集』増補版への序	一五
『安曇野』推薦	一九
『安曇野』祝賀會での挨拶	二九
齋藤子雲のこと	三三
秦恒平の獨自性	三五
佐藤正彰のこと	三七
木村修吉郎氏を偲ぶ	四〇
福林正之君追悼	四三

四 小片集

ギヴ・アンド・テエク	一四
欲望の抑制	一五
高校生諸君に	一五四
王維の五言二句	一五七
老耄の功德	一五九
私と六月	一六
手を焼く	一六〇
カプトムシの勝負	一六三
林瑩雄本『良寛禪師歌集』を推す	一六三
耳が遠くなる	一六四
鳧	一六七

五 舊稿二つ

石川といふ男	一七
二十年前の京都日記	一五
あとがき	二三

「科學者の社會的責任」についての覚え書

「科學者の社會的責任」についての覚え書	三五
---------------------	----

An Essay	二五
----------	----

共同體について	二六
---------	----

夢 雜 記	二七
-------	----

雜纂 二

解説・解題

森鷗外『阿部一族・他三篇』作品解説……………	三二	外國人の見た日本『大正・昭和』解説……………	三七
日本文學アルバム『森鷗外』……………	三四	明治文學全集『ベルツ、モース、モラエス、	
現代日本文學全集『森鷗外集(二)』解説……………	三四	ケーベル、ウオシユバン集』解題……………	四〇
明治文學全集『森鷗外集』解題……………	三六	『深瀬基寛集』第二卷編者後記……………	四三

人と作品

讀書ノート―田邊元先生と三木清氏の哲學―……………	四三	幻想と實證と―串田孫一―……………	四七
三木清の青春時代……………	四四	『蒙古來る』と私―海音寺潮五郎―……………	四九
田邊元先生の發病・入院……………	四五	「生れた・生きた・生きる」の詩人―草野心	
夏目漱石……………	四九	平―……………	六一
芥川龍之介の自殺……………	四六	ドストエフスキイ……………	六三
鷗外の思想について―業績と思想の側面―……………	四六	カラマゾフの兄弟……………	六九

書 評

小田切秀雄著『人間と文學』	四九五	デュアメル著『日本の文明』	五二二
小野隆祥著『塵埃と沙漠』	四九八	片岡良一著『夏目漱石の作品』	五二三
笠信太郎著『ものの見方について』	五〇三	『鷗外全集』著作篇別卷Ⅰ・Ⅱ	五二四
K・レヴィット著『實存主義の哲學的背景』	五〇四	幸田文著『ちぎれ雲』	五二五
人生論ノートの世代相―長興善郎『人間の教師たち』竹山道雄『樅の木と薔薇』山本茂實『救はれざるの記』	五〇六	福島繁太郎編著『ルオー』	五二六
『西田幾多郎全集』別卷三	五二二	松本清張著『小説日本藝譚』	五二七
猪口力平・中島正共著『神風特別攻撃隊』	五二三	マックス・ピカート著『騒音とアトム化の世界』	五二八
三枝博音著『哲學史入門(上)』	五二五	二川幸夫(撮影)、神代雄一郎・福山敏雄(文)『出雲』	五二九
E・H・カー著『ドストエフスキー』	五二七	ゐのせ久子著『青き鞭』	五三〇
吉村善夫著『ドストエフスキー』	五二九	藤森榮一著『心の灯』	五三三

後 記

古いこと新しいこと

一 歴史の生命

歴史の生命

木には木の、石には石の、それぞれの履歴があるだらう。鳥にもけものにもまたそれぞれの來歴があるだらう。自然界の諸物は、すべて各自の履歴、來歴の上に、個物として存在してゐるわけである。しかし、松とか、水成岩とか、雀とか犬とか、さういふ名前を與へたのは人間だらう。飼犬にクロとかジョンとか名づけたのは飼主だらう。自然界の諸物、生きとし生けるものは、人間によつてその來歴を確證され、人間との關係において個物として存在してゐるわけである。博物學が、ナチュラル・ヒストリーであるのもそれを示してゐる。

ヒストリーといふのは、一方では記述・記載を意味すると同時に、來歴・履歴を意味する。松が松と名づけられ、松といふ個物として存在するのは、記載者すなはち人間の營爲の結果である。この時松は既に人間とは無縁ではない。

われわれがいま歴史といふとき、それはまづ人類社會の過去における變遷、興亡の跡、またその記録を意味してゐる。その變遷、興亡の原因や結果を究め、あるひはその法則を導きだすのが歴史學といふことになつてゐる。歴史學はいはゆる通史から分化して、社會史・經濟史、さらに女性史・服裝史等々の専門史になり、いよいよ精緻になつてきてゐる。しかし精緻になればなるほど歴史本來のおもしろさを失つてしまつた。

歴史は過去の記述であるから、現在を歴史の終點と考へるのが一般である。過去にはいくたの興亡があり、革命・變革・斷絶がありながら、それらはすべて歴史といふ大河の中の波紋の如きものと考へる貪欲な歴史主義、連續的歴史觀が現在の我々の重荷になつてゐることもまた否めない。

七、八年前、讀賣新聞社から『人物・日本の歴史』といふ叢書が刊行された。その標語は「人間を見つめよう」であつた。「日本史探訪」もこれと同一線上に生まれてきた。それは精緻になることによつておもしろさが失はれ、連續的歴史觀によつて自由奔放の生き方を失つてしまつた當代の中で、もういちど歴史の幅、人間の幅を考へようとした試みと言つてよい。人間は社會的存在であると同時に生物的存在である。いやときに社會や生物の法則からの逸脱をさへ試みるえたいの知れない生きものである。この人間の不可解さを代表的に示してゐる史上の人物をあらためて考へようとする試みと言つてもよい。「日本史探訪」に、歴史家の外に、作家や評論家が多く登場するにいたつたのも、人間の幅をひろげ、人間の不可解さ、その創造的自由さを考へようとする配慮からであつたと思はれる。

人間はその不可解な創造性によつて、時代や社會の中にありながら、その制約を超脱する。歴史の制約を超えて、自由に過去へ向かつて歩き、過去の存在とまのあたりに對面し、言葉を交すことができる。現在よりも過去

がかへつてリアリティを持つてゐるといふことさへありうる。

私は杜甫の周知の五言律詩、「國破れて山河在り」を思ひ出してゐる。その前半を寫す。

國破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じて花涙を濺ぎ

別れを恨んで鳥心を驚かす

これは安祿山の叛亂によつて國の秩序、治安はくづれ、首都長安は占據されて荒廢し、杜甫自身も賊軍に拘禁されてゐた時の作といはれる。このやうな時世あるひは時勢を悲しんで、「花濺淚」といふのだが、杜甫が花に涙を濺ぐといふ一般の解に對して、吉川幸次郎氏は「花は」あるひは「花も」涙を云々と、涙をながす主體を花にとつてゐる。私はその兩方をかねたのが「花濺淚」ではないかと思ふ。杜甫も泣き花も泣き、人も恨み鳥も恨むといふわけである。國破れて、城春にしての前二句が、歴史の推移に超然として、おのが存在また生命を示してゐる山河草木を見、それにおいて人間の營爲の無常を一層に感じてゐるのに對して、第三句第四句は、己れと花また鳥との共感を詠じてゐる。芭蕉の平泉での句、「夏草や兵どもがゆめの跡」が、右の漢詩をおもかげにしてのものであることもまたひとの知るところである。芭蕉がここを訪れたのは舊曆の五月十三日。折柄の茫々たる夏草の中に藤原氏三代の榮華の跡、無殘な義經の最期の姿を映像として寫しだしてゐる。歴史の興亡とは無縁なはずの夏草が、「や」の一字によつてかへつて歴史を語る當體となり、かねて芭蕉自身の情感の場となつてゐ

る。

杜甫や芭蕉の詩句がかへつて生きてゐる歴史、歴史といふものの生命かもしれぬ。とにかく短い詩句が無限の廣袤くわうぼうを展開し、そこには人の世の興亡とともに、山河草木、花鳥までが歴史的存在として呼吸してゐる。文書や記録といふ史料、また歴史學者の歴史は、右の廣袤をいりどる資料、歴史の生命の註解といふことになるかもしれぬ。

『古今集』の撰者たち

『古今集』をひもどいて、あらためて氣がついたこと、いや驚きあやしんだことが二つ三つある。

その一つは勅命によつて撰者に選ばれた四人がともにさしたる官位をもつてゐなかつたことである。『古今集』の「假名序」に、「延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ」とある。

友則は四十歳頃までは無官で己れをかこつてゐたが、時の左大臣藤原時平に縁あつて認められ、寛平九年（八九七）に漸くにして土佐掾とさのしよに任ぜられ、前記の延喜五年（九〇五）には大内記の職に在つた。大内記といふのは中務省に屬し、五位相當で、詔勅や宣命の起草また位記を書き誄す役である。貫之は勅命を受けた時は三十四歳で、御書所預であつた。即ち宮中の圖書館の次長といふ地位である。目崎徳衛氏はその『紀貫之』（昭和三十六年、吉

川弘文館)で、友則は貫之より二十歳ほど年長であつたと推定してゐるから、友則この時五十四歳ほどといふことになる。貫之が従五位下に敘せられたのは、この時から十二年も後のことだから、撰歌の時代は微官といへようか。躬恒は前甲斐少目といふ肩書だが少目といふのは國府の第四等官で八位相當。延喜五年の頃はいはゆる散位で、宮中の御厨子所に出仕して漸く生計を立ててゐた。これは文字通り卑官である。忠岑は右衛門府生の肩書だが、右衛門府の四等官のさらに下役だといふ。『古今和歌集目錄』の忠岑の項を寫せば、「右衛門府生。御厨子所。定外膳部。攝津權大目。忠實之父。和泉大將定國隨身」といふ次第で、官位の上では一生うだつが上らなかつたやうに思はれる。

『古今集』卷十九の「雜體」の中に壬生忠岑の「古歌ふるうたに加へて奉れる長歌」がある。ここに古歌といふのは、撰者たちが『古今集』編輯に當つて集めた資料の中、『萬葉集』に入らなかつた古歌を指してゐる。その古歌に添へて醍醐天皇に奉つた長歌である。これはやや長いが全部を寫す。

吳竹くれたけの よゝの古言ふること なかりせば いかほの沼ぬまの いかにして 思ふ心を 述べへまし あはれ昔べ ありきてふ 人麿ひとまろこそは うれしけれ 身は下しもながら 言の葉を 天つ空まで 聞えあげ 末の世までの あととなし 今もおほせの くだれるは 塵ちりに繼つげとや 塵の身に 積たかもれる言ことを 問はるらむ これを思へば いにしへに 藥けがせる けだもの 雲にほえけむ こゝちして ちゞの情なさけも おもほえず ひとつ心ぞ 誇らしき かくはあれども 照る光 近き衛まもりの 身なりしを 誰かは秋の 來る方に 欺あそきいでて 御垣みかきより 外の重守おももろの身 御垣守 長々ながしくも おもほえず 九重こゝろかねの なかにては 嵐の風も 聞かざり